



UnifyVISION Release3 以降で上位リリースへのバージョンアップ

UnifyVISION 現リリースインストールディレクトリ c:\¥vision
UnifyVISION 新リリースインストールディレクトリ c:\¥vision_new

注意：UnifyVISION 新リリースがインストールされている必要があります。
UnifyVISION 現リリースはコンバージョン作業には必要ありません。

1. UnifyVISION 現リリースクラス・ライブラリをそのまま使用する

UnifyVISION Release3以降で開発したクラスライブラリは、アップグレードを行わずに Unify VISION 新リリースの開発環境、及びランタイム・マネージャでそのまま使用できる。

(日本語名オブジェクトを持つクラス・ライブラリを除く)

2. 日本語名オブジェクトを持つクラス・ライブラリの変換

UnifyVISION Release3以降で開発したクラス・ライブラリに日本語名のオブジェクト (テーブル名を含む) がある場合は、新リリースでそのまま使用できない。

uvcheck -fixユーティリティを使用して日本語名オブジェクトのタグを修正する必要がある。ここでは、その手順について説明する。

Step1 UnifyVISION 新リリースの環境変数の設定を行う。

```
PATH=c:\¥vision_new¥bin:$PATH  
VISION_HOME=c:\¥vision_new  
LANGDIR=jpn_sjis  
DISPLAY=hostname:0.0  
HOME=c:\¥vis_home
```

(HOMEは現リリースの開発環境のHOMEを指定する)

注) これらの設定は、使用する環境により変更する。

Step2 uvcheck -fixユーティリティで日本語オブジェクトのタグを修正する。

コマンドラインから該当するクラス・ライブラリに対して以下を実行する。

```
$ uvcheck -fix *.ucl (日本語名のオブジェクトを持つクラス・ライブラリ名)
```

3. Unify VISION/Webアプリケーションの変換

現リリースのUnify VISION/Webのアプリケーションを新リリースにアップグレードするためには、新リリースの Unify VISION/Web開発環境で、全てのアプリケーションを再コンパイルする必要がある。

ここでは、その手順について説明する。

Step1 UnifyVISION 新リリースの環境変数の設定を行う。

```
PATH=c:\¥vision_new¥bin:$PATH  
VISION_HOME=c:\¥vision_new  
LANGDIR=jpn_sjis  
DISPLAY=hostname:0.0
```



HOME=c:\%vis_home

(HOMEは現リリースの開発環境のHOMEを指定する)

注) これらの設定は、使用する環境により変更する。

Step2 新リリースの開発環境を起動する。

Step3 新リリースの開発環境で、現リリースで作成したクラス・ライブラリをオープンする。

Step4 Unify VISION/Webのコンパイラ・オプションの指定

クラス・ライブラリ・ウィンドウの「ファイルメニュー」→「コンパイラ・オプション」を実行すると、ライブラリ・コンパイラ・オプション・エディタが表示される。

クラス・ライブラリによってターゲット環境の指定を変更する。

Webクライアント・クラス・ライブラリ: 「VISION/Web」を選択する。

「標準Unify VISION」の選択も可能

Webサーバ・クラス・ライブラリ : 「標準Unify VISION」のみを選択する。

Step5 プロファイルの確認

オープンしたクラス・ライブラリのプロファイルの設定を確認する必要がある。正しく設定されたプロファイルを選択してから、「ファイルメニュー」→「カレントプロファイルにする」を選択しプロファイルをカレントにする。正しいプロファイルがカレントになっていない場合には、次のコンパイルに失敗する可能性がある。

Step6 クラス・ライブラリの全コンパイル

クラス・ライブラリ内の全てのオブジェクトをコンパイルする。

ウィンドウの「ファイルメニュー」→「構築」→「全て」を実行し、全てのオブジェクトをコンパイルする。